

各地の音楽活動

●北海道

八木 幸三

札幌交響楽団の首席指揮者を6年間務めたM・バーメルトが、1月定期で任期を終えた。この公演ではブリテン／セレナードをテノールにI・ボストリッジが天空から降臨したような歌声を聴かせ、ブルックナー／交響曲第6番では一瞬の緩みもない厳格な構成力で、オケから重厚な楽想を存分に引き出していた。4月定期は正指揮者川瀬賢太郎が、19世紀末に生まれた2つの交響曲を並べ、生誕150年になるアイヴズ／交響曲第2番では、アメリカの陽気な雰囲気醸し出しながら川瀬もオケも肩の力を抜いた楽しい音楽づくりに徹していた。5月定期では、引退宣言をしている井上道義が、彼を中心に各パートが分散して同心円状に配置された特異のステージでラヴェル／ボレロを演奏。暗闇の中、次々と独奏者に照明が当てられ、徐々に音楽が高揚。最後の総奏ではホールが全灯となり、満席の観衆から熱狂的な声援が送られた。当初C・デュトワを迎えての6月定期は、彼の降板により名誉音楽監督尾高忠明が急遽、曲目変更なしのドヴォルジャーク／交響曲第9番「新世界より」を新鮮な感覚で牽引。今年の2月定期では、オール・エルガーを尾高が振る予定だったが、彼の体調不良で藤岡幸夫が代振りしただけに、尾高の誠実で新鮮な音楽づくりが満席の聴衆を唸らせた。その尾高は9月定期でホルンの魅力満載のプログラムも指揮。R・シュトラウスの「ホルン協奏曲第2番」は、R・ヴィラトコヴィチを迎え、管弦楽の豊潤な響きをブレンドさせながら、独奏ホルンの柔らかな音色を見事に浮かび上がらせた。10月定期は札幌とは初共演となる上岡敏之が、ブルックナー／交響曲第9番を豪快に指揮。この曲のすぐ後に「テ・デウム」を配し、作曲者が想定していたベートーヴェンの「第9」のような壮大な構成で、「死生観」と神への敬虔な思いを伝えた。11月定期では来年度から首席指揮者に就任するE・グランディが登場。マーラー／交響曲第1番「巨人」で豪快さと緻密さを併せ持つ新たな札幌サウンドを予感させた。

今年で34回目を迎えたパシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF) は、厳しいオーディションを乗り越えた若手音楽家85名が7月に札幌に集結。世界最高峰の教授陣から約一ヵ月間にわたる指導と全30公演のコンサートによる教育音楽祭を繰り広げた。オープニング・ナイトでエネルギッシュな指揮をした客演指揮者E・グランディが、PMFオーケストラ前半のプログラムを爽快地ドライブ。まずR・シュトラウス／交響詩「ドン・ファン」を平均年齢23歳というアカデミー生のエネルギーを凝縮させ、重厚なスコアから豪快なサウンドを放った。C・J・カンを迎えてのプロコフィエフ「ヴァイオリン協奏曲第1番」は、第1楽章冒頭の耽美な旋律がカンの情感溢れるボーイングから紡ぎ出された。ストラヴィンスキーの「火の鳥」ではPMF教授陣が各パートに加わり、ウィーン・フィルとベルリン・フィルメンバー同士の掛け合いが聴けるなど、PMFならではの醍醐味が味わえた。GALAコンサートでは、PMF首席指揮者として迎えられたM・ホーネックの強烈な個性がコンサート全体を支配した。マーラー／交響曲第5番は、PMF教授陣が加わり、主要な独奏を担ったものの、両翼配置による大編成オケの響きはこれまで体感したことのないほどの迫力。攻めの姿勢で音楽を推進させるホーネックの気迫に70分の演奏時間が一瞬で過ぎ去った。PMFアカデミー生が、いくつかの室内合奏団を編成し帯広、奈井江、そして札幌でアンサンブル演奏会を開催。札幌では4つの弦楽合奏団が多彩な室内楽を聴かせた。PMF教授陣による3つの室内楽演奏会も盛況だった。ベルリン・フィルのPMF教授陣による演奏会は、いつもながら多彩で極上の管楽アンサンブルを聴かせてくれる。A・ブラウ (Fl) やS・ウィリス (Hn) ら馴染みのメンバーがダンツィヤタファネルの木管五重奏曲で、まるやかで洗練された音色が聴けた。ショスタコーヴィチ／弦楽四重奏曲第15番から始まったウィーン・フィルのPMF教授陣による演奏は、D・フロシャウアー (Vn) のドリア

法による悲歌的な旋律上に、PMFの顔とも言えるR・キューヒル (Vn) の静謐な音色が重なる。作曲者の晩年に書かれた「生と死」がテーマのこの様な作品がPMFで演奏されるのは珍しい。これも現在の世界情勢を憂うる教授陣の気持ちの表れかもしれない。PMF後半の教授陣であるアメリカ主要管弦楽団員の演奏会は、6つの多彩な曲目が組まれた。ブラームス／クラリネット五重奏曲では、A・リスト(Cl)の豊饒な響きが弦楽器と程良く溶け合いロマン性を醸し出した。13人の教授陣中、PMF修了生が4人いることはアカデミー生にとって大きな励みとなったことだろう。

道内オペラ界では、本格的なオペラを20年間にわたり公演し続けているLCアルモーニカが1月に『アンドレア・シェニエ』を全4幕原語上演。代表の南出薫は、アリア「お母様は私を守って死に」をこれまでのオペラへの愛を凝縮したような歌声で放ち、杉原直基のエネルギッシュな指揮、三浦安浩のわかり易さと壮麗さがほどよく調和した演出で見事な舞台を創出した。11月には老舗団体北海道二期会が創立60周年記念として『こうもり』をダブルキャストで2日間公演。地元キャストに加え東京二期会から宮本益光らも熱演し、中村敬一のエンターテイメントな演出や川瀬賢太郎指揮の札幌、榎谷博子バレエスタジオなどの共演で、祝祭気分満ちたオペレッタが楽しめた。発足1年で、すでに6回目のオペラ公演をおこなった若手声楽家の札幌歌劇団どさんこペラが、『ドン・パスクワレ』を公演。代表の三輪主恭らがコミカルな演技でオペラの楽しさを伝えた。神謡や古謡などを題材にしたユニークなステージを展開するJin企画が、代表の陣内麻友美をタイトルロールに据え、道内の作曲家による創作オペラ『テクノ』を約60年ぶりに蘇演。さらに坂口安吾の原作をスロヴァキアの作曲家V・ゴダールがオペラ化した、『桜の森の満開の下』を道内関係の声楽家と室内管弦楽団により演奏会形式で公演した。

その他の道内演奏家では、歌曲などのピアノ伴奏、チェンバロ独奏などで精力的に活躍する近江宏が演奏活動50周年を記念して、モーツァルトのピアノソナタ全曲シリーズを4回にわたり連続開催。日フィルの首席奏者を務め、その後道教育大教授として後進の育成にもあたったフルート奏者阿部博光が古稀を記念し、広上淳一指揮の札幌と共に4曲の協奏曲を朗々と奏でた。さらにベテラン勢では、針生美智子、一鐵久美子が日本歌曲によるソプラノデュオ、荊木成子が「日本歌曲の系譜」と題したメゾ・ソプラノリサイタル、ソプラノの平野則子が電子音響映像作品で18回目のリサイタルを開催。河野泰幸と岡本孝慈はクラリネットとピアノによりレーガーやブラームス作品で円熟の演奏を披露した。若手演奏家では、ピアニスト水口真由によるオールフランス作品によるリサイタルやクラシック音楽以外にラテンやジャズなど多彩な音楽活動をも展開する按田佳央理が、編曲作品を含めた曲目でフルートの魅力を堪能させた。新進演奏家育成プロジェクトリサイタル・シリーズSAPPRO26は野平枝里が、ドイツ音楽を中心に玲瓏なピアノの音色を聴かせ、同シリーズSAPPRO27では井川太朗が、古典派音楽から近代までの多彩なクラリネット作品を聴かせた。

道内作曲家では、道教育大講師の北爪裕道による企画・構成で「音楽と空間の新機軸」と題したインテグラボ・コンサートを開催。自作など楽器の生演奏とコンピュータ制御の電子音響がホールを飛び交う興味深い音空間を創出。北海道作曲家協会は、「北海道の作曲家展」の10回目を記念する会員3人の共同作品による弦楽四重奏曲を披露。同会会長の杉山佳寿子は、洋楽器、邦楽器を取り混ぜた作曲個展を、同会の田中信義も多彩な演奏形態で作品発表会をおこなった。

八木幸三 (やぎ・こうぞう)

北海道教育大学特設音楽課程卒業。管弦楽・合唱・室内楽・吹奏楽・ミュージカル作品などを多数作曲。札幌市新人音楽会作曲部門、英国エディンバラ音楽祭、ブタペスト現代音楽祭などで作品発表。歌劇「ノンノ」、館野監修左手のためのピアノ作品など作曲。北海道新聞、音楽専門誌『音楽現代』で音楽会評執筆。北の聲アート奨励賞、札幌文化奨励賞、札幌芸術賞などを受賞。北海道作曲家協会会長を歴任。現在札幌音楽家協議会会長。